高等学校日本史の授業と青森県立郷土館資料の関わりについて

滝本　敦[1)]

Collected Items in Aomori Prefectural Museum Which can be Related to Japanese History Lessons at High School

Atsushi Takimoto

Key words：高等学校、日本史A、日本史B、歴史分野、学習指導要領

1．はじめに

青森県立郷土館は総合博物館として、考古・自然・歴史・民俗・先人・産業・美術・教育普及の各分野の資料の収集・保管・展示等を行っている。収蔵されている資料は様々な機会を通じて利活用されているが、特に学校教育の場においては教育普及分野で実施している出前授業など、その機会は多くなっている。また、教職員向けに毎年実施している「授業に役立つ博物館研修」では、研修内容の１つとして、展示室等を観覧しながら授業での展示資料の活用事例について紹介を行っている。

各分野の資料のうち、特に歴史分野の資料は小・中学校、高等学校、特別支援学校等の歴史の授業や総合的な学習の時間の内容に直接関連するものが多く、より一層の利活用が期待される。ここでは、歴史常設展示室に展示している資料の中から、高等学校日本史の教科書の内容と直接関わる主な資料の概要を示すとともに、高等学校日本史の授業における活用事例を提示する。

2．高等学校学習指導要領第２章第２節「地理歴史」　科目「日本史Ａ」・「日本史Ｂ」における資料・博物館の活用に関する内容について

現行の高等学校学習指導要領第２章第２節「地理歴史」の科目「日本史Ａ」・「日本史Ｂ」において、資料や博物館の活用についてどのような内容となっているか、「高等学校学習指導要領解説　地理歴史編」から抜粋すると、主な内容は以下の通りとなっている。

（１）　日本史Ａ・日本史Ｂともに、目標において「我が国の近現代の歴史の展開（日本史Ｂ：我が国の歴史の展開）を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて」考察させることが掲げられている。

（２）　日本史Ａの内容【（１）私たちの時代と歴史】に関して、【内容の取扱い（３）ア】で「近現代の歴史の考察に有効な諸資料についても扱うこと」とし、具体的な資料として「文献、地図～などのほか、博物館や郷土資料館などにある諸資料、身の回りの生活文化や地域の文化財、地名等」を示し、また、「様々なものが歴史的資料となりうることに着目させる」としている。

（３）　日本史Ａの内容【（２）近代の日本と世界　ウ 近代の追求】、ならびに【（３）現代の日本と世界　ウ 現代からの探究】に関して、【内容の取扱い（３）イ】で「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高める」必要があるとし、その際「文献、絵画、～等の既存の資料や博物館などの施設を活用するだけでなく、身近な人々からの戦中・戦後の体験の聞き取り、郷土の近代化遺産や戦争遺跡の見学、それら文化財の歴史的意義の考察なども考えられる」としている。

（４）　日本史Ｂでは、内容【（１）ア 歴史と資料】、【（２）ア 歴史の解釈】、【（３）ア 歴史の説明】、【（６）ウ 歴史の論述】という、諸資料を活用して歴史を考察し表現する一連の学習を通じて、歴史学習にかかわる基本的な技能を段階的に高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとしている。また、【（１）ア 歴史と資料】の【内容の取扱い（２）ア】では「歴史資料には様々なものがあり、それぞれが特色を持っていて、歴史を考察する上での資料となり得ることに気付かせるとともに、歴史資料が果たす役割に気付かせ、歴史への関心を高めるようにする」としている。また、「博物館・資料館等の果たす役割やそこにある資料～、などに着目させて、文化財保護への関心を高め、地域の文化遺産を尊重する態度を養うことも重要である」としている。さらに、【（２）ア 歴史の解釈】の【内容の取扱い（２）ア】では、「文献資料を読むことや、社会を考察する際に絵画資料の読み解きを行うこと、遺跡や出土資料、中世に起源を持つ習俗や建築様式等を題材としてその時代像を描かせ」、「歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を考察するなどの活動」に取り組ませるとしている。

（５）　日本史Ｂの内容【（１）原始・古代の日本と東アジア】の学習では、「視聴覚教材や実物教材の活用、博物館等の利用、遺跡や遺物の見学などを取り入れることは、生徒の関心や意欲を高め、学習を深化させる上で効果的である」としている。

（６）　日本史Ａ・日本史Ｂともに、【内容の取扱い（１）ウ】で、「年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること」とあり、地図や年表を読み、かつ作成したり、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れることで、実物や複製品などの資料と接して知識・理解の一層の定着を図ったり、さらに具体的で多様な情報を得て歴史の考察を深めさせたりすることができるとしている。

1）青森県立郷土館　研究主査（〒０３０－０８０２　青森市本町二丁目８－１４）

３．歴史常設展示室の主な資料の概要について

歴史常設展示室に展示している資料の中から、高等学校日本史の教科書の内容と直接関わる主な資料の概要は以下の（表１）の通りである。なお、展示資料は２０１９年１月現在のものであり、展示替えなどで変わる可能性もある。また、青森県立郷土館では旧石器時代から弥生時代の資料については考古常設展示室で展示しているため、（表１）には掲載していない。

（表１）高等学校日本史の授業と関連のある歴史常設展示室の展示資料

資料分類	資料名	資料の概要
１	細越館遺跡出土土器	青森市の細越館遺跡から出土。５世紀（古墳時代中期）のもので、古墳が分布する地域の土器（土師器）の特徴を示す。県内ではこの時期の遺跡数が少ないため、貴重な資料。
２	丹後平古墳群	飛鳥～奈良時代（７世紀中頃～８世紀）の終末期古墳群。総数１００基前後。「獅噛式三累環頭大刀把頭」（複製、原資料：八戸市教育委員会蔵）をはじめ、武器類、馬具、土器類などの多くの遺物が出土。
３	阿光坊古墳群	飛鳥～奈良時代（７世紀～８世紀）の終末期古墳群。総数１０８基。鉄鏃、ガラス玉、勾玉、土師器類、蕨手刀（おいらせ町教育委員会蔵）などが出土。
４	田面木平（１）遺跡出土土器	八戸市の田面木平（１）遺跡から出土。遺構の年代は７世紀中頃とされる。ロクロ使用以前の土師器（甕・杯）のほかに須恵器、紡錘車も出土（八戸市教育委員会蔵）。
５	奈良時代の住居（復元模型）	南部町前比良遺跡（奈良時代後期の集落跡を主体とした縄文時代との複合遺跡）より復元。縄文時代から使用された竪穴住居は、東北地方では奈良・平安時代まで使用された。内部にかまどを設置。
６	蛍沢遺跡出土遺物	青森市の蛍沢遺跡から出土。ロクロでつくられた土師器のほか、須恵器や鉄製品などが出土。特に、鉄鎌や炭化米、その他鋤･鍬などからみて、稲作が盛んに営まれていたと考えられる。
７	墨書土器	「大」・「幸」・「田」・「寺」・「三」などの文字が書かれた土師器。この墨書土器に書かれている文字が青森県で最初に出現した文字。この他、「大仏」と刻まれた須恵器を転用した硯なども出土。
８	擦文土器	分布は北海道全域から東北地方北部。青森県内では、津軽半島及び下北半島から多く出土。擦文（成形する際につくハケメの擦り痕）や刻文（細い棒で三角形や菱形を描く沈線文）を施してある土器。
９	前田野目須恵器窯跡群（展示パネル）、出土須恵器	五所川原市にある、１０世紀初めから１０世紀中葉の平安時代後半の須恵器の窯跡。この窯跡群を含む五所川原須恵器窯跡群は日本最北の須恵器窯跡である。青森県全域にとどまらず、北は北海道、南は秋田・岩手北部まで須恵器を供給していた重要な遺跡。平成１６年度に国史跡に指定。
１０	杢沢製鉄炉跡（展示パネル）、出土品	鰺ヶ沢町の製鉄炉跡。北東北最大規模の製鉄遺跡で、製鉄炉跡３４基、鍛冶場３基などが見つかり、遺物は土師器、須恵器、羽口（製鉄や鍛冶で高炉内に熱風を吹き込む送風管）、鉄塊、鉄滓（金属を製錬した跡に出る非金属性のかす）、炭化米などが出土。平安時代の製鉄炉跡がこのように多数検出されたのは青森県初で、岩木山麓には鉄生産に関わる古代の遺跡が集中していた。
１１	得宗領地頭代配置図（展示パネル）、「北条泰時下文」	鎌倉時代の青森県は、１３世紀中頃から幕府の執権北条氏の得宗領に組みこまれ、多くの御家人が北条氏の地頭代に任命されている。「北条泰時下文」は、大平賀（現平川市）の地頭となった３代執権北条泰時が、１２３９（延応元）年に地頭代の曽我惟重に発した年貢の納入命令。北条得宗家と津軽の結びつきを示す資料（複製、原資料：岩手大学附属図書館蔵）。
１２	伝尻八館出土品	伝尻八館は青森市後潟にある１４～１５世紀の中世城郭。この時期の輸入陶磁器・国産陶磁器などが多数出土し、特に中国折江省竜泉窯製の「青磁浮牡丹文香炉」・「青磁酒海壺」は貴重な資料。鉄製品・石製品の他、「和同開珎」や中国の「開元通宝」などの古銭も多数出土。
１３	十三湊出土品	十三湊は在地の豪族、安藤（東）氏が拠点とした中世北日本を代表する港湾都市。１３世紀初めに成立し、１４世紀後半から１５世紀前半に最盛期を迎え、１５世紀後半に急速に衰退するまで、日本海交易の拠点港として繁栄。発掘調査からは大土塁や堀、規則的に配置された東西道路など、本格的な都市計画が進められていたことが判明。出土品（五所川原市教育委員会蔵）は、箸などの日用雑器や井戸跡の他、国内産の瀬戸焼・珠洲焼・越前焼・信楽焼、中国産の青磁・白磁・青白磁・褐釉陶器・鉄釉器、朝鮮産の高麗青磁、タイ産の陶器などがあり、国内各地や東アジア圏との交流があったことが分かる。
１４	根城、南部氏、浪岡城、浪岡北畠氏（展示パネル）、「足利直義御教書」	南部氏は、南北朝期の内乱の際、根城南部氏４代の師行を中心に南朝方として活躍し、その本拠地としたのが根城とされる。一方、浪岡北畠氏は、南北朝期の内乱の際に南朝側に尽くした北畠親房の子孫とされ、そのうち北畠顕家系統が本拠地としたのが浪岡城。「足利直義御教書」（複製、原資料：盛岡市中央公民館蔵）は、北朝方の足利直義が南朝方の根城南部氏の政長に対して、北朝への参戦を促す内容となっており、南北朝の内乱と県内の武士一族との関係性を知ることができる。

資料分類	資料名	資料の概要
１５	「南部信直宛豊臣秀吉朱印状」	豊臣秀吉の支配下に入った南部信直に対して、１５９０（天正１８）年に出された朱印状。秀吉が信直の領地を安堵するかわりに、検地の実施や人質の提出、三戸城下への集住などを命じており、統一政権の主要政策の内容が示されている（複製、原資料：国立国文学研究資料館蔵）。
１６	「徳川家綱朱印状」	４代将軍徳川家綱が１６６４（寛文４）年に発した領知の支配保証書で、弘前藩の領知朱印状としては最古とされている（複製、原資料：国立国文学研究資料館蔵）。
１７	弘前藩の家臣支配、領内把握に関する資料	「知行状」は１７５６（宝暦６）年に弘前藩７代藩主津軽信寧が家臣の井上次左衛門に発した１００石の知行宛行状。「陸奥国津軽郡御検地水帳」（複製、原資料：弘前市立弘前図書館蔵）は、１６８７（貞享４）年に完了した弘前藩の総検地の結果を記した土地台帳で、耕地の全てが把握された。「大光寺村天和書上絵図」（複製、原資料：個人蔵）は、弘前藩が有力農民に提出を命じた村絵図の１つで、地目・土地等級・河川や用水・街道などが書き込まれている。裏書には当時本百姓４０軒、水呑百姓６軒と記入されるなど、領知把握が視覚的に行われており、このような作業の後、貞享の総検地が実施されている。ともに江戸時代の藩政・大名の支配体制の状況を表すもの。
１８	藩札	諸藩が藩財政の収入を補う目的で領内に通用させた紙幣。弘前藩では１８３７（天保８）年に、御用達商人である宮崎八十吉が発行元で発行された「宮崎札」が多い。
１９	近世の絵図、城下町弘前の復元模型	幕府の命による国絵図や城下町・諸都市の絵図により、当時の国や都市の状況を知ることができる。「陸奥国津軽郡之絵図（弘前藩正保国絵図）」は、１６４５（正保２）年に幕府に提出した絵図の副本を１６８５（貞享２）年に写したもの。「青森之絵図」（複製、原資料：弘前市立弘前図書館蔵）は１６７３（寛文１３）年当時の青森町を描いたもので、同年３月にあった大火による焼失区域や町の範囲、藩関係の各建築物の所在地などが描かれている。「九浦外町絵図」は九浦と呼ばれた青森、鰺ヶ沢などの弘前藩の主要な港町、及び関所を描いたもので、江戸時代後期の産業・交通の様子がわかる貴重な資料。「城下町弘前（城と町割）」の復元模型は、弘前城と城下町の町割が復元され、城郭や城下町の構造などが立体的に把握できる。「文久改正八戸御城下略図」（複製、原資料：八戸市立図書館蔵）は、江戸末期の文久年間（１８６１～６４）の八戸城下図。各屋敷に居住武士の名が記載されるとともに、記号により家格ごとに分類されており、武家町の配置や構造を知ることができる。
２０	「チヂリ」、「アットゥシ」、「マンダリ」	蝦夷地のアイヌの人々がオヒョウやシナノキの皮から作ったアットゥシ、和人との交易などで手に入れた木綿から仕立てた綿服のチヂリなど、蝦夷地との活発な交流のなかで青森県に伝わった衣服。
２１	「蝦夷錦」	江戸時代、大陸・サハリン・蝦夷地を経由した北方交易（山丹交易）によってアイヌ民族、松前藩を経て日本各地に運ばれた中国製の絹織物。龍文・牡丹文などの色鮮やかな刺繍があり、珍重された。北方交易路の存在とその内容を知ることができる資料。
２２	アイヌ民族の県内居住を示す絵図	近世の時期に青森県域にアイヌ民族が居住していたことを示す絵図として、１６４５（正保２）年の「陸奥国津軽郡之絵図」（津軽半島の３カ所に「狄村」の記載）、１６９５（元禄８）年の「下風呂村道丁絵図」（複製、原資料：個人蔵。「狄屋敷」の記載）、年不詳「三馬屋町御絵図」（複製、原資料：弘前市立図書館蔵。「かぶたかいぬ」の名が記された家を記載）などがある。
２３	海運の発達と商人（廻船問屋）の繁栄に関する資料、展示室床面の地図	近世の青森県は東廻り海運と西廻り海運の接点や蝦夷地交易の中継地として重要で、海運で全国と結ばれた。「田名部湊昆布蔵図屏風」（個人蔵。田名部湊（現むつ市）の廻船問屋山本家の昆布蔵を描いたもの）、「滝屋伊東家使用印」（江戸時代後期に繁栄した青森屈指の廻船問屋の滝屋で使用した判）、「長崎御用俵物儀定証文帳」（個人蔵。田名部湊（現むつ市）の廻船問屋で、下北半島の俵物の集荷を行った山本家がまとめた、長崎俵物に関する取り決めを記したもの）など、県内諸港の商人（廻船問屋）に関する資料が残っている。展示室床面の地図は、青森を中心として国内・北方・大陸・朝鮮半島などとの距離が視覚的に把握できるようになっている。
２４	海運の船に関する諸資料	江戸時代に海運で活躍した北前船（弁財船）に関する資料。「船絵馬」（航海の安全を祈願して奉納した船の絵馬）として「金比羅丸図」、「榮寶丸船絵馬図」、積載物として「徳利」（むつ市教育委員会蔵）、装備品として「明通丸船額」、「碇」、「蝦夷地御用旗」、「加祥丸船名旗」（個人蔵）、「香時計」（個人蔵）などがある。
２５	異国船の接近に関する絵図	１８世紀以降、南下政策をとるロシア船を描いた「魯西亜人持参之船図」・「ヲロシイヤ人船之図」・「ロシア船図」、１７９２（寛政４）年に根室に来航したロシア使節ラクスマンを描いた「ラクスマン一行の図」、異国船撃退の様子を描いた「魯西亜船打払ノ図」・「北郡佐井村岡弁天御台場分間絵図面」（複製、原資料：十和田市立新渡戸記念館）などがある。

資料分類	資料名	資料の概要
２６	蝦夷地警備の説明（展示パネル）	異国船の接近が頻発するなか、蝦夷地警備は弘前・盛岡両藩を中心に行われた。その功により両藩は加増されたが、警備にかかる負担は財政を圧迫した。警備費をまかなうための年貢の増徴や、警備への動員などによって民衆の負担も増大し、一揆も続発した。
２７	江戸時代の産業の発展に関する資料	「浪千鳥硯箱」は１７世紀後期の津軽塗で、名工池田（後、青海）源兵衛の作品。津軽塗は特に元禄年間、弘前藩４代藩主津軽信政により奨励された。「耕作噺（写本）」は、１７７６（安永５）年に堂野前村（現南津軽郡田舎館村）の中村喜時が著したものを高舘村（現黒石市）の農民が書き写したもので、津軽各地の農法について見聞をまとめたもの。「木崎之牧図」（複製、原資料：もりおか歴史文化館蔵）は明治初期に旧盛岡藩の名所を描いた「御旧領名所図巻」中の１場面。木崎之牧は現三沢市にあった南部九牧のひとつで、馬産に努めた盛岡藩の藩営牧場の１つ。「木造新田新村豊富村領田畑絵図」（複製、原資料：国立国文学研究資料館）は、岩木川低湿地に開拓され１８５６（安政３）年に完成した弘前藩最後の藩営新田である木造新田豊富村を描いたもの。「俵元新田浅井村絵図」は、現五所川原市浅井地方にできた津軽地方の典型的な新田村を描いたもの。
２８	「転切支丹類族離別之覚」、「寺請状」	「転切支丹類族離別之覚」は、１６９６（元禄９）年に浪館村（現青森市浪館）の転切支丹（弾圧によって改宗したキリシタン）である小泉長兵衛の娘を、その夫が離別したと報告したもの。「寺請状」は、１８０１（享和元）年に弘前市の誓願寺が森田村の佐五右衛門弟利八に交付したもので、仏教帰依者であることを証明した書状。ともに、江戸幕府の禁教政策を表すもの。
２９	「天明卯辰日記」	江戸時代に最も被害が大きかったとされる天明の大飢饉の惨状について記録した１７８３～８４（天明３～４）年の３冊の日記。天明の大飢饉では弘前藩で約８万人、盛岡藩で約６万人、八戸藩で約３万人以上の餓死者を出したとされ、多くの被害者を出した飢饉の実情を伝える資料。
３０	江戸時代の人々の生活、文化に関する資料	「富札」は寺社が修繕費や経営費の財源を得るために富くじとして売り出された札で、弘前の専修庵、袋宮寺、東照宮が天保年間（１８３０～４４）に発行したもの。「近世街道図」は江戸末期に作成された旅人携帯用ガイドマップで、街道沿いの主な宿駅や名物などが記載されている。旅枕・道中合羽・三度笠などの「旅装束」は旅行の際に用いた一般的な衣服で、江戸時代に人々が長距離の旅行・寺社参詣などを行うようになったことに関する資料。「稽古館本」は、弘前藩９代藩主津軽寧親の時代の１７９６（寛政８）年に創設された、弘前藩の藩校である稽古館で使用された教科書などの書籍。江戸時代に各藩で創設された藩校での教育に関する資料。
３１	江戸時代の風景・風俗を描いた資料	「暗門山水観」・「合浦山水観（西浜）」は、幕末の弘前藩の国学者・絵師、平尾魯仙が描いたものを弟子の山形岳泉が模写してまとめたもの。「暗門山水観」は暗門川流域、「合浦山水観（西浜）」は鰺ヶ沢などの津軽西海岸の景観を描いている。「奥民図彙」（複製、原資料：国立公文書館内閣文庫蔵）は、弘前藩士比良野貞彦が寛政年間（１７８９～１８００）に津軽地方の庶民像や風俗を描いたもの。「津軽図譜」は、弘前藩お抱え絵師の百川学庵が１９世紀初頭に藩内の名勝や博物画を描いた２５枚の連作。これらは江戸時代の風景・庶民の生活・風俗が読み取れる貴重な資料。
３２	「切支丹邪宗門禁止の高札」（五榜の掲示第三札）	「五榜の掲示」は、明治新政府が１８６８（慶応４）年に、人民に対して守るべき事柄を５枚の高札として掲げたもの。内容は五倫の道をかかげ、徒党・強訴・逃散の禁止、万国公法に従うこと、脱藩の禁止など。第三札はそのうちキリスト教を邪宗として禁止したもので、１８７３（明治６）年に撤去された。明治初期の宗教政策に関する資料。
３３	青函連絡船「比羅夫丸」	鉄道国有化後の１９０８（明治４１）年に青函連絡船航路が開かれ、比羅夫丸と田村丸の２隻が就航した。比羅夫丸は最新式蒸気タービン船。船名は阿部比羅夫、坂上田村麻呂に由来。明治末期の絵はがき。
３４	「日本鉄道陸奥地方画譜」	１８９１（明治２４）年、日本鉄道会社が上野－青森間の最終区である盛岡－青森間を開通し、東北本線全線が開業。画家の川口月村が、開通前年の冬から春にかけて盛岡以北の沿線風景や停車場建築の様子などを描いた２５枚の画譜。
３５	「青森実地明細絵図」	１８９２（明治２５）年の青森町の絵図。東北本線開業・青森停車場建設直後の市街地の様子が分かる資料。また、余白に当時の主な商店・公共施設などの絵図が掲載されている。なお、青森県立郷土館には他にも地図・都市図が収蔵されており、それらの比較から街並みの変化などを知ることができる。
３６	地券	１８７３（明治６）年の地租改正条例により政府が発行した土地所有の権利書で、展示資料は１８７８（明治１１）年発行のもの。表面に土地の種類、面積、地価、地租、所有者など、裏面には地租改正による近代的土地所有権について明記されていて、明治初期の新政府の政策を表す資料。
３７	「東奥義塾設立許可願」	東奥義塾は、旧弘前藩藩主の津軽承昭の援助を受けた旧弘前藩士菊池九郎が、本田庸一らと協力して弘前に１８７２（明治５）年に開いた本県初の私立学校。「東奥義塾設立許可願」（複製、原資料：東奥義塾高等学校）はその設立の許可願で、同年の学制発布に伴う学校設立の動きを表す資料。

資料分類	資料名	資料の概要
３８	青森空襲の映像	１９４５（昭和２０）年７月１４～１５日の空襲により、北海道産の石炭の輸送など、重要な運輸機関であった青函連絡船が大打撃を受けた。その後、７月２７日夜には青森市内に約６万枚の爆撃予告ビラが投下され、翌２８日、B-２９により青森空襲が行われ、市街地の約９０％が焼失した。
３９	電気洗濯機	昭和２０年代の初期の丸形電気洗濯機（個人蔵）。昭和３０年代には急速に普及し、冷蔵庫、白黒テレビと並んで家庭の「三種の神器」と呼ばれた。
４０	青森県立郷土館旧館部分	１８７２（明治５）年制定の国立銀行条例に基づき、１８７９（明治１２）年に創業した第五十九国立銀行の青森支店として、１９３１（昭和６）年に建設された建物。その後１９４３（昭和１８）年の青森銀行の創業から１９７０（昭和４５）年まで同行本店として使用された後、建物は青森県に寄贈され、１９７３（昭和４８）年に開館した青森県立郷土館の大ホールとして使用されている。

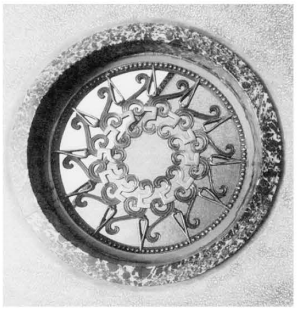
＊　【資料分類４０】の「青森県立郷土館旧館部分」は青森県立郷土館の建物自体が歴史資料となっていることを指す。

４．高等学校日本史の授業における資料活用の事例

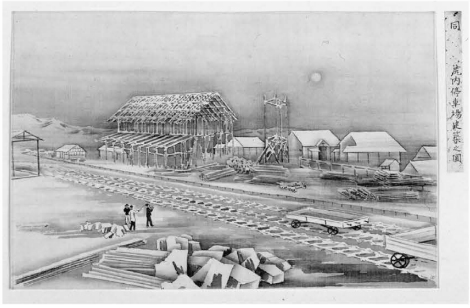
ここでは、前述の（表１）で取り上げた資料の一部について、「高等学校学習指導要領解説　地理歴史編」の内容と関連させながら、実際の高等学校日本史の授業における活用事例をいくつか提示する。なお、具体的な資料については、（表１）の【資料分類】の番号で示し、一部写真も掲載した。

（１）　日本史Ｂの内容【（２）中世の日本と東アジア　ウ 中世社会の展開】では、学習の際にアイヌ社会との関わりや明・朝鮮との様々な形での交流など、東アジア規模で人と物の動きが活発になったことやその影響に留意させるとしている。この内容に関しては、安藤（東）氏が拠点とし、中世北日本を代表する日本海交易の一大拠点である十三湊関連の資料を活用することができる（【資料分類１３】）。中国・朝鮮・タイ産などの陶磁器出土品から東アジア圏との交流が分かり、安藤（東）氏が蝦夷管領（蝦夷との交易・交渉などを取り仕切る役職）を代々受け継ぎ、蝦夷や樺太などの北方との関係をもったことなどを示すことができる。

（２）　日本史Ａの内容【（２）近代の日本と世界　イ 近代産業の発展と両大戦をめぐる国際情勢　（ア）】、日本史Ｂの内容【（４）近代日本の形成と世界　ウ 近代産業の発展と近代文化】において、近代産業の発展については、金融や交通・通信など産業基盤の整備が進められたことなどにより、我が国の資本主義が確立したことを考察させるとしている。この内容に関しては、県内の金融・交通の整備の例として、１８７９（明治１２）年に創業した第五十九国立銀行に関する資料（【資料分類４０】）、日本鉄道会社による１８９１（明治２４）年の東北本線上野－青森間の全線開通に関する資料（【資料分類３４】）、１９０８（明治４１）年の国鉄による青函定期航路の開業に関する資料（【資料分類３３】）を活用することができる。



【写真１】「青森県立郷土館旧館」部分の階段のレリーフ（第五十九国立銀行にちなみ、５と９の数字をあしらっている）



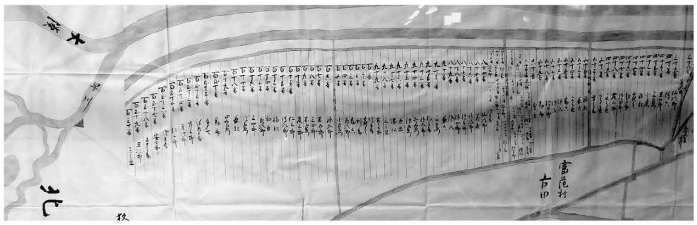
【写真２】「日本鉄道陸奥地方画譜」より、「尻内停車場建築之図」（現在の八戸駅建設の様子を描いている）

（３）　日本史Ｂの内容【（３）近世の日本と世界】では、国際関係の変化について近世初期及び近世後期それぞれのヨーロッパ諸国のアジア進出を含む世界の動向に着目させるとなっている。また、その中の【イ　近世国家の形成】では、検地などの政策や身分制度の形成が近世の政治、経済や社会の基盤形成に果たした役割を、兵農分離や村落・都市支配などの観点から考察させるとある。さらに、【ウ　産業経済の発展と幕藩体制の変容】では、幕藩体制下の農業など諸産業や交通・技術の発展、欧米諸国のアジア進出などに着目することをあげ、その際、全国規模での陸上・水上交通の発達や商品流通の活発化、貨幣の流通や金融制度の確立など、諸産業の発達と都市の経済的繁栄に気付かせるとしている。さらに、幕藩体制が動揺していく過程を、欧米諸国のアジア進出やそれへの対応と関連付けて考察させ、その際、幕府・諸藩における財政の窮乏や百姓一揆・打ちこわしの増加、幕府の外交体制に対する批判などに着目させる、としている。

この内容に関しては、まず近世の政治体制構築に関する資料（【資料分類１５・１６】）、弘前藩の家臣支配・領内把握に関する資料（【資料分類１７】）、近世の国や都市の状況・構造を表す資料（【資料分類１９】）、身分制度などに関する資料（【資料分類２８】）があげられる。次に、農業等の諸産業や陸上・水上交通の発展、金融に関する資料として、江戸時代の産業の発展に関する資料（【資料分類２７】）、海運の発達と商人（廻船問屋）の繁栄に関する資料（【資料分類２３】）、海運で活躍した船（北前船など）に関する資料（【資料分類２４】）、弘前藩の金融に関する資料（【資料分類１８】）があげられる。

また、欧米諸国のアジア進出や諸藩の財政窮乏に関する資料として、異国船の接近に関する資料（【資料分類２５】）や、蝦夷地警備により弘前・盛岡両藩の財政が圧迫されたことを背景に、年貢の増徴・警備の動員に伴う民衆の負担増とその結果としての一揆が続発したことを説明する展示パネル（【資料分類２６】）があげられる。

【写真３】「転切支丹類族離別之覚」

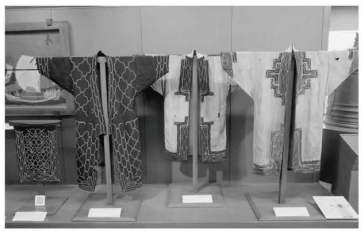


【写真４】「木造新田新村豊富村領田畑絵図（一部）」（洪水防止の長い堤防や短冊型の細長い耕地が特徴的に描かれている）

【写真５】「ラクスマン一行の図」（左端に描かれている人物がラクスマン）

【写真６】「北郡佐井村岡弁天御台場分間絵図面（一部）」（盛岡藩が現在の下北郡佐井村に築造した大砲台場の絵図）

（4）　日本史Ｂの【内容の取扱い（1）オ】において、「地域社会の歴史と文化について扱うようにする」とあり、日本列島内の諸地域について、文化の特色や他地域との交流などに着目することを指摘している。例としては、東北・北海道などの北からの視点や環日本海などの海を媒介としてつながる地域という枠組みなどで見ることが考えられる。この内容に関しては、アイヌ民族との交易に関する資料（【資料分類２０・２１】）や、アイヌ民族の県内居住を示す資料（【資料分類２２】）などが活用できる。



【写真７】「アットゥシ、チヂリ、マンダリ」

【写真８】「蝦夷錦龍文打敷」

５．おわりに

今回は、歴史分野の資料のうち常設展示室に展示している資料で、かつ高等学校の日本史の授業内容に直接的に関連すると考えられるものに対象を絞って概要を示し、活用事例を紹介した。しかし実際には、収蔵庫に保管しているその他数多くの資料や考古・先人・民俗といった他分野の資料も、我が国の歴史をたどる上で重要な資料である。また、今回取り上げた資料は高等学校の日本史の授業のみならず、小学校・中学校の社会科の授業でも活用できるものである。

今後は、収蔵庫に保管中の資料を対象とした活用事例などについて検討する必要がある。また、資料の積極的活用や、博物館などの調査・見学といった内容がより一層盛り込まれている次期学習指導要領との関連についても考察することが課題である。

６．謝辞

学校教育と博物館資料との関連について助言をいただいた青森県総合学校教育センターの金子勇太指導主事、ならびに、資料に関する助言をいただいた当館の佐藤良宣学芸主幹、杉野森淳子主任学芸主査に厚くお礼申し上げる。

（参考文献）

・文部科学省、２０１０年（２０１４年一部改訂）、「高等学校学習指導要領解説　地理歴史編」【第２章 第３節　日本史Ａ、　第２章 第４節　日本史Ｂ、　付録３　高等学校学習指導要領第２章 第２節　地理歴史】、教育出版株式会社
・笹山晴生・佐藤信・五味文彦・高埜利彦ほか、２０１５年、「詳説日本史」、株式会社山川出版社
・２０１６年、「新詳日本史」、株式会社浜島書店